

協定海外留学プログラム：ショートプログラム

留学先大学：パリ・セルジー国立高等美術学校（フランス）

芸術学部 美術学科 洋画専攻 4 年次

N・M さん

日本では“女心と秋の空”というが、フランスでは“男心とパリの空”というほど不安定な天気の中、私は新しい生活に向けて期待でいっぱいだった。空港に着き国際担当のニナさんが迎えに来てくれて、安心して寮に向かった。だが、管理人に案内された部屋はコンロも冷蔵庫も動かない、窓には大量の虫の死骸、とにかく悲惨な状況だった。そのためしばらくは違う部屋に泊まりリフォームを待った。出だしからつまずいてしまったが、パリでの美術漬けの生活は私の気持ちを高揚させた。

私が通ったセルジー美術学校は学術的な教育方法を取っていて、各自で授業を選択しカリキュラムを作成する。エラスムスという 6 ヶ月の契約でセルジーに滞在している学生が多く、アルゼンチン、ロシア、アフリカ、韓国、中国と様々な国籍の人が在籍しており、グローバルな環境だったが日本人は一人もいなかった。2 週間に一度のコーディネーションは、コーディネーターチームと学生に、自分の作品を発表する場である。パフォーマンスや口頭での発表、ディスカッションを自由に行う。英語でも可能だが私はすべてフランス語で行った。日時、場所は自分で決め、鍵や Wi-Fi のすべてを管理している M. Steven を尋ね、部屋を選び、予約し、発表に備える。したがって、自分の作品をインストールする際に部屋全体を意識することがセルジーの生徒にとっては日常的なことであり、インсталレーションのレベルが非常に高い。そして、1 週間に一度の絵画の授業時間になったら先生が見に来るということではなく、自分から先生に作品を見せに行く。フランスでは生活を含め、積極的で能動的になること、作品に関しては高い完成度が求められる。

私にとって一番の幸せは、休日にポンピドゥーの公共図書館とパリの展覧会に通い詰めたことだ。学生証があれば大抵の美術館は無料で入れるため美大生にとってはありがたく、ギャラリーや美術館は多くのアーティストやファミリーでにぎわっていた。図書館には膨大な量の美術に関する本が並び、休日の朝から親子が勉強しに来る光景はあまり日本では見られないため、子供の頃から美術や読書に親しむ習慣をうらやましく思った。

フランスと日本の文化の違いは想像以上だった。慣れるのにいちばん時間がかかったのは、人との関わり方だ。私たち日本人は何か事を起こした際、「すみません」と一言言えば、反省していることを相手が察知してくれ、逆にしつこい言い訳は相手に不快感を与えてしまう。フランスではその逆で、言い訳を多くするほど感じがいい。自分の考えたこと、そのために起こした行動、すべてを言葉にして伝えることで相手も理解してくれる。一概にそうと言えるわけではあるまいが、黙っていると意見も知識もない人間だと思われる。前半の 1 ヶ月はあまりの文化の違いからおじけづいたが、途中から文法、発音などめっちゃくちゃではあったが気にせず話すうちに自然と会話が理解できるようになっていった。美術館に入るための待ち時間や隣人、スーパーのレジ係、掃除する人などありとあらゆる人と話した。

話の内容は大抵“愚痴”である。「この建物には一つしかトイレがなくて困るね」とか「なんでこんなにレジがあるのに 20 分も待たなくちゃいけないんだ」など、多くのフランス人が他愛ない話で盛り上がる。

そして少し驚いたことはフランスで日本ブームが起きていること。セルジーにも日本学の授業があり、他にはファッションとして取り入れられている着物、ジューポームでの「大名」というテーマの展示、日本舞踊の演目など、日本の文化は受け入れられていて、人気沸騰中なのだ。

どんな立場の人とも、目が合えばどちらともなく Bonjour と言ひ、日常がディスカッションの場であり、情が深く協力的であって、別れる際は必ずさようなら、良い 1 日を! と微笑み合うフランスの人々の習慣が心地よかった。偉大なフランス人アーティストは挙げるときりがないが、本物の作品を毎日のように見て制作できるこの環境は、私にとって最高のシチュエーションであり、2 ヶ月半じゃ足りないと感じるほど、充実した留学体験となった。

協定海外留学プログラム：1 セメスタープログラム

留学先大学：パリ・セルジー国立高等美術学校（フランス）

芸術学部 デザイン・工芸学科 ヴィジュアルデザイン専攻 3 年次

H・S さん

一月末、たくさんの希望と不安そして声援を胸に、どんよりと雲に覆われた冬のパリへと飛び立ちました。留学が正式決定したのは、学校の始業日の一ヶ月半前。かなりタイトなスケジュールにもかかわらずフランスへの協定留学は私が初めてで前例が無かったため、出国まで刻一刻と迫っている中で準備は手惑うことが多く、気が滅入るほど大変でした。さらには、現地に着くまで住む場所が決まらないというホームレス留学生だったのです。とてもじゃないけれど、あの状況でポジティブにはなれませんでした。

学校が始まり私の目に写った光景は、型にはまることなく各々の表現を磨き制作を楽しむ生徒と、空間を大きく使った作品の数々、そんな生徒達が主体となり作り上げていく授業でした。まず、女子美のように決まった時間割はなくチャイムが鳴らなければそれぞれの授業ごとに始業時間も終業時間もバラバラ。教室の場所は全て先生に確認しなければわからないという、困惑だらけの履修登録でした。私が体験した違和感は、初日以降もしばらく続きます。これは後々現地の友達に聞いた話ですが、フランス人は話し合うことが好きで、自分の意見を曲げないお国柄だそうです。まさしくその通りで、先生のとある一言が物議を醸し、物凄い速さのフランス語でディスカッションが始まるなんていうことが常日頃の授業で行われていました。それも、一部の生徒だけでなく教室の至る所から声が飛んでくるのです。先生が講評している最中、意義があるのなら言葉を被せ納得するまで一時間延々と話し合っている彼らの制作姿勢は、私にとっても大切なことを教えてくれた気がします。

在学中、プレゼンテーションをする機会が度々ありましたが、自分の作品にも関わらず言葉が足りず伝えきることが出来なかったあの悔しさは、今でも胸に突き刺さります。話すことに自信がなく消極的になってしまう私に対して、クラスメイトの皆はじっと耳を傾けてうなずいて聞いてくれていました。美術を学ぶにあたってのフランス語は、単なるツールであってその先にもっと得られる大切なことがあるのだけれど、やはり言葉の壁は何よりも障害でした。本音を言うとたった五ヶ月の留学で、自分が望んでいた十分な結果が得られたかという嘘になります。

パリから電車で30分ほどのセルジーという街はいわゆる大学都市で数多くの大学や学生寮があり、そのうちの一枚は語学学校として通っていました。世界各国から訪れた留学生や、日本語を学ぶフランス人と交友をもつことは、美大の友達とはまた違う世界を知るきっかけになりました。互いの言語で簡単な挨拶を教え合ったり、BBQ やホームパーティーをしたり、バーに飲みに行ったり、週末はパリへ一緒に出かけました。また、フランスはバカンス大国なので頻繁に訪れる休暇の度に南仏の友達の家でホームステイをしたり、ロンドンへ一人旅したりと、とにかく旅行して過ごしました。

最後に、私が留學生活を送る上でまずに肝に銘じたことがあります。それは「日本での常識を捨てる

”ことです。日常生活や学校生活の全てにおいてカルチャーショックが付き纏い、もし日本だったらな
とつい比べてしまいますが、その違いを受け入れむしろ楽しむこと(私の場合、Twitter にネタとして
面白おかしく投稿していました)で留学生活が豊かになり、何よりフランスの魅力をたくさん感じ取る
ことができました。語学力に自信がなかった私ですが、素晴らしい経験や友人達との出会いを通して、
英仏語はもちろん、他の言語も話せるようになりたいと思うようになりました。これからも勉強を続
けていくつもりです。フランスでは、挨拶をする際に頬同士でキスをするビズ(Bisous)という習慣が
あるのですが、いつかまた、彼らと再会のビズをかわしたいです！